

冬の狩人

装幀 國枝達也

装画 緒賀岳志

H県警察本部のホームページに、未解決重要事件の情報を受けつけるメールボックスが設けられたのは二年前のことだ。

県内第三の都市、本郷市ほんとうの料亭で起こった殺人事件が、発生から一年経過するも、容疑者の特定すらできていないことから、設けられた。

同様の、未解決重要事件の情報を求めるメールボックスは、他の県警察本部ホームページにもある。メールボックスに寄せられた情報のチェックは、各県警の捜査一課がおこなう。

H県警の捜査一課では、川村芳樹かわむらよしき巡査がそれにあたっていた。川村は本郷市の高校を卒業後、東京の情報処理専門学校に進学し、都内で二年間の会社員生活を経て地元に戻った。

第二の就職先になったのが、H県警察だった。県警察学校を経て、巡査を拝命したのが二十五歳と、通常よりは遅かったものの、頑健な体と強い好奇心をもって職務にあたった結果、三年で刑事に抜擢され、さらにそれから二年で捜査一課に配属された。

メールボックスのチェックは、一課の新米刑事の仕事で、川村が配属されるまでは二歳上の石井がその役目を負っていた。

石井の話では、メールボックスが設けられた二年前は、毎日のように情報が寄せられていたという。その大半は、本郷市で起こった事件とは無関係の、近隣に対する苦情や警察への要望で、事件解決に多少なりともつながるかもしれないと感じたのは、二十件に一件でいどで、当たった結果、すべて空振りだった。

川村がチェックを始めてからは、苦情、要望以外のメールは一件も届いたことがなかった。

その朝も、川村は出勤するとすぐ、デスクのパソコンを立ちあげ、メールボックスをチェックした。

捜査一課の新民には、お茶汲みの仕事も課せられるため（その日最初の一杯だけだが）、通常川村は十五分早くでて、メールチェックをおこなうことにしていた。

メールが一通、届いていた。何の期待もせず、開いた。

一読した川村は腰を浮かせた。課内を見回したが、誰もまだ出勤していない。

メールは、事件直後から重要参考人として捜査本部が行方を捜していた人物を自称する者からだった。出頭し、事件の詳細について話したい、とあった。

川村の次に出勤してきたのは石井だった。メールを見せると、石井も驚いた顔をした。

「本物かな」

「わかりませんが、名前はまちがっていませんよね」

メールの差出人は「阿部佳奈」となっていた。三名が撃たれて死亡、一名がいまだに昏睡中という被害のあった事件で、唯一、現場から姿を消しているのが「阿部佳奈」だった。

事件発生当時、三十二歳。死亡した被害者のひとりで、東京の虎ノ門に事務所をもつ弁護士上田和成の秘書である。事件当日、上田とともに本郷市を車で訪れ、現場となった料亭「冬湖楼」に入店する姿を、何人もの人間が見ている。

冬湖楼は、昭和三十年代に建てられた木造三階だての洋館風の建造物で、本郷市では最も高級な料亭として知られていた。

その冬湖楼三階、「銀盤の間」には、五人の客がいた。

予約は午後六時から入っていたが、会食のスタートは午後七時で、それまでは最初の茶の給仕以外は、仲居も一切、部屋に近づかないよう、予約時に求められていた。

料理を運んでほしいときは内線電話で連絡をする。それまでは、三階に人をあげないでもらいたい、というのだ。

求めたのは、冬湖楼を予約した大西義一^{ぎいち}だった。大西は、県最大の企業「モチムネ」の副社長である。モチムネは特殊な計測機器のメーカーで、有するパテントによって、世界市場の三割を保有していた。本社は本郷市、工場が県内各所にあつて、従業員の総数は八千人で、これは本郷市の人口の十分の一に近い。

つまり本郷市はモチムネの企業城下町で、冬湖楼も、モチムネ関係者による利用があればこそ、営業をつづけてこられたのだ。したがって、そのモチムネの副社長の要望に反することは、とうてい考えられない。

午後七時三十分になっても、だが「銀盤の間」からの電話はなかった。会議が長びいているのだろうか。と冬湖楼側は考え、連絡を待った。ただ五人の客のうち、ひとりとは食事をせずに七時には帰ることになっていて、専用の車も待機していた。その客とは、本郷市の市長、三浦英臣^{ひでおみ}である。七時四十分、三浦の秘書が「銀盤の間」の内線電話を鳴らした。応答はなかった。

十分後、市長秘書は三階に上がり、「銀盤の間」の扉をノックした。何度ノックしても返事はなく、秘書は非礼を詫びながら、扉を開いた。

大きな円卓のおかれた「銀盤の間」が血に染まっていた。四人が椅子や床に崩れ伏している。

通報をうけ、救急車がただちにやってきたが、四人のうち三人は絶命しており、唯一、モチムネ副社長の大西義一、七十二歳だけが呼吸をしていた。が、頭部にうけた銃弾のせいで、三年たった今も意識を回復していない。

死亡していた三名は以下の通り。

本郷市長、三浦英臣、四十九歳。

東京虎ノ門、弁護士、上田和成、四十八歳。

兼田建設社長、新井壮司、五十二歳。

兼田建設は、県内最大手の建設会社で、社長の^{もろちむ}新井はモチムネの社長、用宗源三の義弟にあたる。用

宗源三の妹、^{さきこ}冴子の夫である。

三名の死者と意識のない大西義一以外、「銀盤の間」は無人大った。上田とともに冬湖楼を訪れた、秘書の女の姿はない。

県警は、ただちに本郷中央警察署に捜査本部をおき、事件の解明にあたった。

その結果、四名は全員、四十五口径の拳銃で撃たれ、^{せんじょう}旋条痕からすべて同一の銃であることが判明した。

四十五口径の拳銃は、太平洋戦争時、アメリカ軍が制式拳銃に採用したほどの大型拳銃であり、反動も大きく、使用に慣れない人間には、至近距離からでも命中させるのは難しいといわれている。

ふつうに考えれば、現場から唯一姿を消している阿部佳奈が、四人殺傷の容疑者だが、自衛隊や警察に勤務経験のない、三十二歳の女性が果たして、そこまでの凶行をおこなえるものか、捜査員は疑いを抱かざるをえなかった。

阿部佳奈がどのようにして姿を消したのかは、明らかになかった。

古い建築物である冬湖楼には、火災に備え、あとづけの非常階段が外壁に設置されており、それを使って屋外にでたのだ。非常階段を降りると、冬湖楼裏手の庭園にでる。そこからは、建物の正面を通ることなく、ふもとに通じる道に降りられるのだ。

冬湖楼は、本郷市を見おろす高台にあり、そこに至る道路は、関係者しか使用しない。阿部佳奈は、その道路を使って逃走したと思われる。

さらに捜査が進むと、冬湖楼へとつながる道を走行するバイクを見たという証言者が現れた。時刻は午後六時過ぎ、五名が「銀盤の間」に入って、それなりの時間が経過した頃、ふもとから冬湖楼のたつ高台へと、バイクが登っていったというのだ。

日没後なので、バイクの型やナンバーはもちろん、フルフェイスのヘルメットをかぶったライダーの人相も不明だった。

当日、冬湖楼をバイクで訪れた者はおらず、このライダーが事件に関係している可能性は高かった。

捜査員の中には、このライダーこそが四人殺傷の犯人にちがいないと考える者も多かった。バイクで冬湖楼に近づき、庭園から非常階段を使って三階にあがり、「銀盤の間」を襲撃したのだ。阿部佳奈は共犯で、襲撃者を手引きし、犯行後、二人で逃走した。

使用された凶器を考えるなら、その線が濃厚と思われる。

阿部佳奈が襲撃者を手引きした理由は、金銭か、あるいは恨みか。いずれにしても、阿部佳奈の身边を、捜査本部は徹底して捜査した。が、阿部佳奈と襲撃者の接点をうかがわせる材料は何も見つからなかった。

金銭的に困窮してはおらず、特に親しい交友関係にある男もいない。むしろ疑われたのは、雇い主で

ある弁護士の上田の恋人である可能性だった。

上田とは長い時間を共に過ごしてはいた。が、阿部佳奈の周辺では、男女関係だったという噂は聞かれなかった。

都内の大学を卒業後、大手の法律事務所に就職し、五年勤務のあと、その事務所を独立する上田に引き抜かれるようにして勤務先をかえてはいるが、二人が関係していたという、確とした証拠はなかった。

ただ阿部佳奈の経歴は少しかわっていた。神奈川県出身で、高校時代に両親を交通事故で亡くしている。妹がひとりいて、事故後、大学に進学した阿部佳奈は都内で妹と同居しながら、夜、水商売のアルバイトを始めた。

アルバイト先は銀座のクラブで、機転がきくことから人気もあり、経営者はずっと働きつづけてほしいと頼んだが、卒業後はきっぱり辞め、法律事務所に就職している。ちなみに、この法律事務所所長の弁護士は、そのクラブの客だった。

就職して二年め、妹が死亡して、阿部佳奈は天涯孤独の身になった。

妹の死因は薬物中毒死。事故・自殺、両方の可能性が疑われたが、捜査にあたった警視庁渋谷警察署は「事件性なし」の判断を下している。死亡時、妹は大学生で、渋谷のキャバクラでアルバイトをしていた。店で呼吸困難を訴えて倒れ、救急車で病院に運ばれたが、ほどなく息をひきとった。解剖の結果、当時はまだ規制をうけていなかった脱法ドラッグを常用していたことが判明した。

唯一の身よりであった妹を亡くし、阿部佳奈はかなり落ちこんだが、やがて元気をとり戻した。ただ、もともと人とのあいだに垣根を作る傾向にあった性格が、より強まったと周囲の人間は感じていた。雇い主である弁護士の上田は独身だったこともあり、阿部佳奈に好意を抱いていたようだが、男女関係に

なることは拒んでいたという。

いずれにせよ、現場からの逃亡は、事件への関与を示すものだと思うわれ、捜査本部は重要参考人として阿部佳奈を手配した。

が、それから三年が経過しても、阿部佳奈を発見することはできなかった。すでに死亡しているのではないかと考える捜査員もいた。

襲撃者の手引き後、口封じのために殺されたのではないか。あるいは逃走時、人質として連れだされ、用済みになったので殺された。

冬湖楼のたつ高台には、人家の少ない山林がある。そこに死体を遺棄すれば、簡単には見つからない。県警は機動隊を動員し、その山林の搜索もおこなった。が、死体はおろか、犯人の手がかりとなる物証も見つけられなかった。

県警が大規模な捜査をおこなったのには、もうひとつ理由があった。死亡した本郷市長の三浦英臣は、元警察官僚でH県警の幹部だった経歴があるのだ。

本郷市の市長は、三浦の前に四期つとめた人物も、かつての県警本部長だった。その前の市長も同様で、H県警の幹部をつとめたキャリア警察官が本郷市の市長に就任するという習わしがあった。もちろん選挙によって選ばれているのだが、モチムネの支援をうけた候補者に、対立候補が立つことすらまれという状況が、この三十年つづいていた。

三浦の死後おこなわれた市長選でも、キャリアでこそないが、元本郷中央警察署長が立候補し、初当選を果たした。

事件はこうして迷宮入りの可能性を示唆し始めた。そこに突然、重要参考人本人と称する人物からのメールが届いたのだ。

捜査一課に、ぞくぞくと刑事が出動してくる。やがて一課長の仲田なかたも出勤してくると、川村はプリントアウトしたメールを見せた。

仲田は五十四歳で、H県の県庁所在地であるH市に生まれ育ち、三十六年、H県警につとめているベテラン警察官だ。

「本物か」

仲田も、石井と同じような言葉を発した。

「わかりません。発信者のアドレスは、携帯電話ではなく、インターネット喫茶等のパソコンでこしらえたもののようです」

川村は答えた。

「阿部佳奈の携帯は事件後一度も使われていません」

かたわらに立った石井が補足した。携帯が使用されていないことで死亡説が浮上したのだ。

「それでこの、佐江さえという人物は何者だ」

全員が沈黙した。メールはこう始まっていた。

『突然、メールをさしあげます。わたしは冬湖楼事件で、皆さんがお捜しの阿部佳奈と申します。あの日、殺されるのを危うく逃れ、以来、恐怖と不安に怯おびえる三年を過ごして参りました。

世間では、わたしが上田先生を含むお三方を殺害した犯人の仲間だと疑っておられる人もいますが、誓ってわたしは犯人とは無関係です。わたしが殺されずにすんだのは、たまたまあの部屋を離れ

ていたからに他なりません。

トイレに立ち、叫び声が聞こえたので、ようすをうかがうと、ヘルメットをかぶった犯人が上田先生を撃つところでした。恐くてたまらなくなつたわたしがつと見ると、非常階段の扉がそこにありました。今となつては、なぜ階下に降りて、冬湖楼の人たちに知らせなかつたのかと悔いるばかりですが、もしわたしがそうしていたら、犯人はその人たちにも銃を向けていたかもしれません。

わたしが非常階段を降り、庭園に隠れておりますと犯人が同じように非常階段を降りてきました。そして止めてあつたバイクに乗り、逃げだしたのです。

しばらくのあいだ、わたしはその場から動けませんでした』

川村は捜査一課長の仲田にいった。外部の非常階段を使い、バイクで犯人が逃走したというのも、これまでに判明した捜査結果と一致する。

「それはそうさ。阿部佳奈が共犯だつて同じことをいう。それ以外に逃走手段はないのだから」

石井がいった。メールはまだ先があつた。

『警察の皆さまは、なぜそのとき、わたしが通報しなかつたのかと不審の思いを抱かれると思います。ですが、理由がご置います。』

その理由とは、あの日、冬湖楼に上田先生、モチムネの大西副社長、兼田建設の新井社長が集まつたことと関係があります。三浦市長は、上田先生と大学の同級生ということで、途中顔をだされ、すぐお帰りになる予定でしたので、たまたま巻きこまれたとしかいいようがありません』

「まちがいなく阿部佳奈本人ですよ」

川村はいった。三浦市長と上田弁護士が大学の同級生であつたことを捜査本部はつきとめていたが、

公表していない。

「だけど週刊誌が報道してなかったか。二人が同じ大学だというのは」

石井がいった。仲田は二人の顔を見やり、無言でメールのプリントアウトに目を向けた。

『お三方が集まられた理由について、ここに記すわけには参りません。残念ながら日県警察に対して、わたしは全幅の信頼を寄せる身ではないからです。ですがこのまま共犯の疑いを晴らさずにいるわけにも参らず、出頭し、わたしの知るすべてをお話ししようと決心いたしました。』

ただ、犯人はまだ自由の身ですし、わたしの決心を知れば、襲つてこないとも限りません。そこでお願いがございます。

あるところでお名前を知り、この方なら、絶対に信頼できるという刑事さんがいらつしやいます。その方による保護、同行が得られますものなら、わたしは出頭し、お話をいたします。

その方は、警視庁新宿警察署、組織犯罪対策課につとめておられる佐江警部補です。佐江警部補とわたしは面識がございません。ですが、佐江警部補なら、何があつてもわたしを守つてくださる方だと信じられます。

どうか佐江警部補と連絡をとり、わたしを保護してくださるよう、伏してお願ひ申しあげるしだいです。』

仲田は椅子に背中を預け、息を吐いた。

「我々が信用できないってのは、どういうことなんですかね」

石井がくやしげにいった。

「どうします、課長。この佐江という人に連絡をとりますか」

川村は訊ねた。

「俺の一存では決められない。刑事部長にあげてみないと」

仲田は答え、川村を見た。

「お前、この佐江という警部補について、本人に接触しないで調べられるか」

「新宿警察署のホームページとかは当たれると思いますが、ひとりひとりの情報については難しいかもしれません」

「そうだな。刑事の個人情報なんて簡単にはだせないからな」

「去年、研修で知り合いになった警視庁の人間がいて、確かそいつが今、新宿署の刑事課にいます」

石井がいった。

「連絡をとっているのか」

「ラインがつながってはいいます。内緒で訊いてみますか」

「信用できるのか。それはつまり、この佐江という人物に、我々が興味をもっていることを秘密にしておけるか、という点でだが」

わずかのあいだ考え、石井は頷いた。

「できると思います。警視庁は大きすぎる、本当は地方の警察で働きたかったっていつているような奴でしたから」

「メールについては、一切口外無用だ。その上で、佐江という人物についてだけ、情報をとれるか」

「やってみます」

「川村は、このメールについて調べてくれ」

仲田は机上の内線電話に手をのばした。刑事部長は一年前に警察庁からきたキャリア警察官で、冬湖棲事件について詳しくは知らない。が、未解決重要事件なので、このメールを端緒に犯人を検挙できれば

ば、大きな得点となる。この佐江という警部補に連絡をとれ、というような気が川村はしていた。

刑事部長がでると、仲田は時間をもらいたいと告げ、了承を得るや立ちあがった。メールのプリントアウトを手に行っている。

「他に誰が知っている？」

「石井さんだけです」

川村が答えると、頷いた。

「当分、外には秘密だ」

捜査一課長の仲田が部屋をでていくと、川村と石井は自席に戻った。石井は早速、携帯電話を手に行っている。

川村は、阿部佳奈を自称する人物のメールが、どこから発信されたのかをつきとめようと、作業を始めた。東京で二年間勤務したのが、ネットセキュリティの会社だったので、少しはそういう知識がある。

一時間後、仲田が戻ってくると、川村と石井を呼んだ。課をでて、使っていない取調室に入る。

「どうだ？」

「さっき返事がありました。この佐江という人は、現在休職中だそうです」

石井がいった。

「休職？」

「去年、高河連合の連中と撃ち合いをして大怪我をしたそうです。退院後、FBIに研修にいき、その後はずっと休職しているとのことですよ」

仲田は眉をひそめた。

「FBIにまで研修にいつて、休職とはどういうことだ？」

「これは噂ですけどが、本人は辞めたがつているのを、上がひきとめているみたいです」

「そんなに優秀だということか」

「わかりません。俺の知り合いは、おつかなくてほとんど話したことがない、といつてました。なんでも、新宿の極道には、めちゃくちや嫌われているらしいです」

「そっちは？」

仲田は川村を見た。

「東京の荻窪^{おぎくぼ}にある『スペース』というインターネットカフェのパソコンから発信されたものでした。昨夜の午後九時十二分です」

川村は答えた。

「そうか。ではまたメールがくるな。このメールに我々がどう対処するか、反応を知りたいだろうからな。よし、東京にいつてくれ。このインターネットカフェを見張って、阿部佳奈がきたら、身柄を確保だ」

仲田はいった。

勘は外れた、と川村は思った。刑事部長は佐江という警部補の協力を得ずに、事件を解決する道を選んだようだ。

だが阿部佳奈が、同じインターネットカフェを使わなかったら、どうするのだ。東京には、それこそ何百軒、もしかすると千軒近いインターネットカフェがある。そのときのことを課長は考えているのだろうか。

まただ。コーヒーショップのスタンドに並んだ佐江は舌打ちした。目の前のガラスケースに、自分と店の外に立つ若い男の姿が映りこんでいる。

入院生活とアメリカでのまづい飯のせい、いくぶん痩せはしたが、腹はあいかわらずつきでいて、この一カ月のぼしたヒゲに交じった白髪のおかげで佐江はひどく年寄りに見える気がする。

それでもヒゲを剃らないのは、もう刑事ではない、と鏡を見るたびに自分に得心させるためだ。

なのに、本庁の監察かどこか知らないが、この二、三日、ずつと自分の行動確認をしている奴がいる。またそいつの尾行がからつ、たときいて、いらつくほどだ。

辞表はとつくに組対課長に提出した。受理されるのは時間の問題だ、と佐江は思っていた。

確かに自分は、警視總監が末代まで秘密にしておきたい「不祥事」を知ってしまった。が、それを公表する気はさらさらないし、自分もまた、殺人犯を逃走させている。見逃したのではない、逃がしたのだ。「消えろ」といつて。撃たれ、激しく出血はしていたが、頭の中は冷静だった。

だからこそ、処分は覚悟していた。

アメリカに研修に送られた理由はわかる。事件について嗅ぎ回る記者どもから離しておくためだ。だからほとぼりがさめた今、自分がクビにならないことが不思議だった。

休職という宙ぶらりんな状態におかれ、職捜しもできずにいる。上の連中は、警察を追いだされた俺が、よほど悪い真似をするでも恐れているのか。

高円寺のアパートにこもっていても、くさくさするので、外にでる。気づくと新宿にいる。新宿が好

きなわけではない。それどころか新宿には、佐江が警察官でなくなったと知れば、これまでの恨みを晴らしてやろうと、手ぐすねひく極道どもがたつぷりいる。

紙コップのコーヒーを手に店をでると、あわてて看板の陰に隠れる若造の姿が見えた。

まだ三十そこそこだろう。紺のスーツに白シャツとネクタイといういでたちは、昼間の歌舞伎町ではむしろ目立つ。

「おい」

佐江は声をかけた。若造が固まった。

「お前だ。どこで尾行のやりかた習ったんだ？ この下手クソが」

「わ、私ですか」

若造は瞬^{まばた}きした。佐江はその顔をにらみつけた。どこといつて特徴のない顔だちだが、垂れた目尻がいかにもお人好しを思わせる。刑事らしくない顔だ。

いや、刑事に見えないから、むしろ向いている顔というべきだろうか。

「私ですかじゃねえ。お前、いったいどの者だ？」

いいながら、佐江はあたりを見回した。この若造ひとりということはない筈^{はず}だ。最低でも、もうひとり。これが本気の行動確^{かく}認なら、尾行に五、六人はつつこむ。

向かいのビルの入口に立つ男が、目を合わせまいと顔をそむけた。この若造とたいして年はちがわない。

妙だ、と佐江は思った。監察なら、若造二人が組んでくることはありえない。

佐江は若造の首に紙コップをもった腕を回し、その体を引き寄せた。

「ちよつと話そうや」

「やめて下さい」

若造はあらがった。佐江は腕に力をこめた。

「く、苦しい」

「やかましい」

佐江は若造のスーツをもう一方の手で探った。身分証のバッジケースを胸ポケットからひっぱりだす。

「ちよつと、何を——」

若造の体をつきとばし、佐江はケースを開いた。

「何だあ。H県警つて、どういうことだ」

若造の所属は、県警刑事部捜査一課となっている。川村芳樹巡查。

「返して下さい。返せ！」

若造の声が真剣になり、佐江はバッジケースをその胸に押しつけた。

「なんで俺をつけ回す」

「ご、誤解だ。あんたのことなんか知らない」

「ふざけるな。この何日間か、しかも同じそのスーツで俺をつけ回してたことはわかってる。高円寺の

俺のアパートもその格好で張りこんでいただろうが」

川村の顔はまっ赤になった。

「こい！」

佐江は川村のネクタイをつかんだ。

「いや、待って下さい」

「うるさい。こいといったらこい！」

佐江は川村をコーヒーショップの裏の路地に連れこんだ。

路地の奥まで進んだ佐江はうしろをふりかえった。あとを追ってきた川村の相棒があわてて身を隠す。雑居ビルの非常階段がある。夜は酔っぱらいの定位置で、寝こんだり胃の中身をぶちまけている。昔はよく、ガキがカツアゲに使っていた。

佐江はそこに川村をひっぱりこんだ。

「H県に知り合いなんかいないぞ。何の用だ」

「だから誤解だといってるじゃないですか。あなたのことなんか知りません」

「おい、お前、ナメてるのか」

佐江は川村の目をのぞきこんだ。川村の目にとまどいが浮かんた。

「俺を誰だかわかってつけ回してたのだろうが、え？」

川村は目を伏せた。額に汗がにじんでいる。

「答えろよ」

佐江は川村の額を指先で小突いた。

「やめて下さい」

「尾行が下手なのはしょうがねえな。こんな人の多い場所でやったことなんてないから、見失いたくない。く、びったり張りついてたつてわけだ」

川村は無言だ。

「どうする？」

「え？」

川村は目をみはった。

「どうするって訊いてんだよ。ここですつと絞られたいか。それとも、歌舞伎町を見学するか？」

「け、見学って」

佐江はにやりと笑った。

「お前、ここがどんなところだかわかってるか。お前の地元とはまるでちがう。歌舞伎町に組の事務所がいくつあると思う。十や二十じゃないぞ。ざつと百はある。何丁目だの何番地だのが縄張りとか決まってるわけじゃない。同じビルでも、店の一軒一軒でちがうんだよ。ちよんどのいい。すぐそこに高河連合をとびでた組の事務所がある。のぞかせてもらうか。大丈夫だ。この辺の極道は、皆、俺のツラを知ってる。仲よくしたがつちやいないが、俺のことを知りたいなら、喜んで教えてくれる」

佐江は路地のつきあたりを指さした。一見、廃墟のようだが、実際は使われているビルだった。所有者は高河連合元組員の妻で、焼肉店の女将^{おかみ}だ。死んだその父親も組員だ。

川村は佐江の腕をふり払った。

「そんなことは知ってます。俺は東京に住んでいましたから」

語気を荒らげた。

「なるほど。そこまで田舎者じゃないといたいわけか」

答えて、佐江は頭上を仰いだ。ビルの外壁からつきでた監視カメラが見おろしていた。

佐江は中指を立ててみせた。

「とにかく、いいがかりはやめて下さい。迷惑です」

川村がいったので佐江は笑いだした。

「おいおい、迷惑って何だ。お前、刑事だろう。こんな真似されて、迷惑です、ですますのか。パクレよ。傷害未遂の現行犯逮捕なら、いけるだろう？」

川村はくやしげな表情になった。

「どうした？　パクれない理由があるのか。あるならいつてみる」

そのとき不意に、つきあたりのビルの入口におりていたシャッターがあがった。スポーツウエアを着た男四人が姿を現す。

「何だあ、お前ら。ひとん家うちの下で何やつてんだ、こら」

ひとりが巻き舌ですごんだ。まだ二十はたちをでたかどうかという小僧だ。

「おい、お前。そのカメラにナメたことしたろう。お前だ、おっさん！」
頭を剃りあげた、さして年のかわらない別の男が佐江をにらみつける。

佐江は川村を見た。

「どうする？」

「どうするって……」

川村は困ったようにいったが、その顔に恐怖は浮かんでいない。

「聞いてんのか、この野郎」

スキンヘッドが佐江の顔をのぞきこんだ。

「うるさいな、お前」

淡々と佐江がいうと、目が吊りあがった。

「ぶっ殺すぞ、この野郎！」

「ほう」

佐江はいつて、スキンヘッドと向かいあつた。

「やれるか？」

「何だとお」

離れてなりゆきを見ていた、少し年かさの男が、あつと叫んだ。

「ちよつと待て、お前」

「何すか」

スキンヘッドはふりかえった。

「ヒゲ、のばしたんですか」

年かさの男は恐る恐るといった口調で佐江に訊ねた。佐江は顔の下半分をおおったヒゲに触れた。

「なるほど。威勢のいいガキだと感心してたが、これのせいか」

「何いつてんだ、おつさん。事務所こいや、おらあ」

スキンヘッドがいつて佐江の腕をつかんだ。

「やめとけ！」

年かさの男がいつたが遅かった。腕をつかまれた瞬間を逃さず、佐江はスキンヘッドの右手首の関節を逆にひねりあげた。

「おつと。やつちまつたな」

「申しわけありません！」

年かさの男が叫んだ。

「気がつかなかったんです。佐江さんとわかつてたら、こんなことしません」

「佐江……」

「嘘だろ……」

男たちはいつせいに後退つた。スキンヘッドは佐江の顔をのぞきこんだ。

「いてて……。あつ、本当だつ」

スキンヘッドの腕を佐江は放した。年かさの男に向き直る。

「俺とわかつてたらしなさいといったな。つまり俺じゃなければ、やっただことだ」

「そんなつもりじゃないす。見逃して下さい！ 宿直が退屈だったんで、外の空気を吸おうと思っただけなんです」

「ほう。外の空気を吸うついでに、そこにいたオヤジをちょいと締めたわけか。たまたまその相手が俺だった、と」

「本当に許して下さい。佐江さんにちよつかいだしたなんてわかったら、俺ら全員、カシラにどやされます」

年かさの男は腰を九十度に折った。

「いい時代だな、おう。どやされてすむ。昔なら指が飛んだ。今は指も刺青ガマンも、はやらない。見るからにやくざつてのは、格好悪いらしいからな」

「勘弁して下さい！」

スキンヘッドがいきなり土下座した。

「おいおい、さっきの威勢はどうしたよ」

川村は目を丸くしている。

「そこっ、何してる?！」

叫び声とあわただしい足音が響いた。制服の警察官四人が路地に走りこんできたのだ。歌舞伎町交番の巡査たちだ。そのうしろには、逃げた川村の相棒がいた。

佐江はあつけにとられた。

「おい、お前の相棒、一一〇番したのか」

「あれ、佐江さんじゃないですか。どうしたんです？」

ヒゲ面でも新宿署員にはさすがにわかるのか、先頭の巡査が訊ねた。

「何でもない、気にすんな」

佐江は手をふった。川村は制服警察官とその背後にいる相棒を見やり、唇をかんでいる。

「大丈夫か、川村」

その相棒が話しかけた。

「大丈夫ですよ、もちろん！」

川村が大声で答えた。よけいなことをするなといわんばかりだ。

佐江は首をふり、相棒を見すえた。

「お前もH県警か」

「な、何の話ですか」

相棒は動揺したようにいった。

「H県警？」

制服が驚いたようにふりかえった。

「そうだよ、それも捜一らしいぞ」

「えっ」

「こいつら、この何日か、ずっと俺のことをつけ回してんだ」

「佐江さん、H県で何かしたんですか」

制服が訊ねたので、

「馬鹿野郎、いったこともねえよ」

佐江は首をふった。

「あの……」

足もとで小声がした。土下座したスキンヘッドだった。

「いすか、もう」

「おう、忘れてた。消えろ」

佐江はいった。スキンヘッドははねあがるように立った。

「申しわけありませんでした」

「お手間かけましたあ」

口々に叫んで、シャッターの奥へと駆けこんでいく。シャッターはすぐに閉まった。

「何やったんです」

それを見送り、驚いたようすもなく制服が訊いた。

「俺とこの若いのが話していたら、ひとり家うちの下で何やってるつてきやがった」

「話してただけで？」

「カメラにこうした」

佐江が中指を立てると、制服はあきれたように首をふった。

「無茶な人だな」

川村の相棒が上着から携帯をひっぱりだした。耳にあて、応える。

「石井です」

「あれも捜いいか？」

佐江は川村に小声で訊ねた。川村は無言で頷いた。

「いや、それがですね、川村が見つかって……」

石井を名乗った、川村の相棒の声が低くなった。携帯を掌てのひらでおおい、小声で話している。どうやら上司からの電話のようだ。

「どうします？ 交番か署にいきますか？」

制服が訊ねたので、佐江は首をふった。

地上四階地下一階という、小さな警察署並みの規模の交番が歌舞伎町にはある。ことが大きくなったら、困るのは二人だ。

若い刑事の経歴に傷をつけたくなかった。

「お前がわけを話してくれればいいんだ」

佐江はいつて川村を見た。川村は無言で唇をかんだ。

「川村、課長だ」

電話で話していた石井が携帯をかざした。

「いいですか」

川村は佐江に断り、石井に歩みよると携帯を受けとった。

「川村です。いや、別に、何もありません。大丈夫です」

「いいぞ、戻って」

佐江は制服に手をふった。

「でも……」

「あのう」

川村が携帯をおろし、佐江を見やった。

「うちの課長が、佐江さんにお話をしに、新宿署にくるそうです」

「新宿に？」

佐江は驚いた。

「はい」

「ちよつと待て。俺は――」

「休職中でしょう」

川村がいった。

「それは――」

上が勝手に決めたことだといいかけ、佐江は黙った。そんな話をここでも始まらない。

「県警の刑事部長を通して、新宿署さんには話をするそうです」

川村がいった。

「何だかおおごとになってませんか」

制服が佐江を見つめた。

4

新宿警察署の会議室に佐江が入っていくと、副署長、組対課長、川村、石井、そして知らない顔が二人並んでいた。

「佐江さん、ヒゲをのばしたんですね」

副署長が愉快そうにいった。キャリアには珍しく、現場の顔と名前を覚えていた。

「きちんとクビになったら剃ろうと思つてますよ。職捜しにはマズいでしょうから」
顎に触れて佐江が答えると、知らない顔二人が目を丸くした。

「佐江さん、こちらは日県警の刑事部長をしておられる高野さん、そして隣が捜査一課長の仲田さんです。若い二人には、もう会つておられますね」

副署長が紹介すると、高野と仲田は立ちあがり、腰を折った。高野はおそらくキャリアで、副署長より年上だ。仲田は五十代半ばの、いかにも刑事という面がまえの男だった。

「お偉いさんまでできて、いったい何だつていうんです？」

佐江は立つたまま六人の顔を見渡した。

「まあすわれ。話は仲田さんからしてもらう」

組対課長が答えた。佐江が言葉にしたがうと、仲田は上着から老眼鏡と手帳をとりだし、頭を下げた。「まずお詫びをさせて下さい。この二人は私の部下で、佐江さんに失礼を働いたのは、すべて私の指示でした。本当に申しわけありませんでした」

「別に失礼なんてありません。暇をもて余していたので、こちらも無茶をしました。こちらこそ申しわけない」

佐江はいって川村に頭を下げた。川村はとまどつたような顔をしている。

「ところで佐江さん、阿部佳奈という女性をご存じですか」

仲田が切りだした。

「いいや」

佐江は首をふった。

「個人的な知り合いではなく、事件関係者として知り合った記憶ありませんか」

「ない。個人的には女性に縁がないし、組対にいたんじや、極道の女房か愛人くらいしか、事件関係者の女性とは知り合いようがない。阿部佳奈という女は知らない」

仲田と高野は目を見交わした。

「偽名を使っていたかもしれません。写真はこれです」

仲田が手帳からだした。

学生服姿の少女の写真だった。手にとり、佐江は訊ねた。

「いったい今、いくつなのですか」

「三十五歳です」

佐江は眉をひそめた。

「当人が写真嫌いで、高校の卒業アルバム以外の写真がないのです」

仲田がいった。

佐江はもう一度、写真に目を落とした。勝ち気そうな目をしている。髪型は、短いおかつぱだ。高校三年といえば、大人並みに色気づく者もいるだろうが、そういう気配はまるで写真から感じられない。

「記憶にない顔です」

佐江はいった。高野が身を乗りだした。

「佐江さん、『冬湖楼事件』と呼ばれている殺人事件をご存じですか。三年前に、H県の本郷市で発生した事案です」

かすかに記憶があった。

「料亭かどこかで何人かが射殺された事件ですか」

「そうです。本郷市の市長、地元の大手建設会社社長、東京の弁護士三人が射殺され、地元企業の副社長がいまだに昏睡状態です。『冬湖楼』という料亭が現場でした。犯人は検挙されておらず、現場からいなくなった弁護士秘書を、重要参考人として手配しております」

高野が答えた。

「その弁護士秘書の名が、阿部佳奈です」

仲田がいった。

「阿部佳奈は、殺害の実行犯、あるいは共犯ではないかと我々は疑っています。犯行に使用されたのは四十五口径の拳銃で、女が使うには大型すぎる。銃を使い慣れた犯人を現場まで手引きしたと思われる」

「三年間にわたり、県警は阿部佳奈を捜してきました。生きているとすれば、出頭しない理由は、犯人かその共犯だからだとしか考えられません」

高野があとをひきとった。

「共犯だったが、犯行後すぐに消されたとか」

佐江はいった。

「もちろんその可能性も考え、現場周辺の山狩りもおこないました。ですが、阿部佳奈の足どりはまったくつかめないまま、三年がたってしまったのです」

「そこへ、先日こういうメールが県警のホームページあてに届きました」

仲田がさしだした紙を佐江は受けとった。

阿部佳奈を名乗る者からのメールをプリントアウトしたものだ。それによれば、自分は犯行とは一切かわりがない。が、その場で通報も出頭もしなかったことには理由があり、それがH県警にかかわつ

ているらしいことをほのめかしている。

佐江は二度読み、仲田に紙を返した。H県警にとつて屈辱的な内容のメールを、よく自分に見せたものだ、と思った。事実であればもちろん、虚偽であつても、外部の人間にとうてい見せられるような代物ではない。

「本人からだと断定できるのですか」

自分の名がそこにあつたことはさておき、佐江は訊ねた。

「いくつかの点で、本人である可能性が高いと考えております。まず三浦市長と上田弁護士の関係ですが、週刊誌が同じ大学であるとは書いておりますが、同級生であつたことまでは報じていません。また『冬湖楼』に外階段があり、犯人がそれを使用した上バイクで逃走したというのも、これまでの捜査で判明した事実と一致します」

仲田が答えた。

「このメールはどこから発信されたのです？」

「東京の荻窪にある『スペース』というインターネットカフェです。我々は阿部佳奈が再びそこを使う可能性を考え、人員を配置しましたが現れませんでした」

「それで俺を張りこんだというわけですか。この重参が俺の周辺にいるかもしれないと考えて」

「その通りです。同じ警察官に対し、あるまじき行為かもしれませんが、県警としてはそうせざるをえませんでした。このメールも、恥をしのんでお見せしております」

仲田の顔に苦渋がにじんでいた。

「理解できます。日本中、どこの警察でも、まず自分たちで重参の身柄を確保しようと考えますよ」

副署長がいつて、佐江を見た。

「そうですね。俺がこの事件の実行犯だという可能性もある」

「それについてはちがうとわかっています。事件発生時、佐江さんは中国人連続殺人の捜査にあたっておられました」

『五岳聖山』だ」

組対課長がいった。

「五岳聖山」と呼ばれる、中国の五つの山の名を刺青で体に入れた複数の中国人の死体が見つかり、佐江は通訳兼任の中国人捜査補助員の毛と、外務省アジア大洋州局中国課の女性職員、野瀬とともに捜査にあたった。事件には中国人犯罪組織、暴力団、そして中国国家安全部と警視庁公安部までがかかわった。

「あのときか。とうていH県までなんていけなかったな」

佐江はつぶやいた。

「佐江さんが事件と直接かわりがないことを、我々も疑っておりません。ただ、このメールの発信者が阿部佳奈なら、なぜ佐江さんの保護を希望しているのか、知りたいのです」

仲田がいった。

「気持ちにはわかります。だが俺にもその理由がまるでわかりません。だいたいなぜ俺が、何があっても守ってくれる人間だと信じられるのか。俺はそんなに立派な警察官じゃありません」

佐江は答えて、組対課長を見やった。

「いや、そんなことはない」

組対課長は気まずそうに首をふった。

会議室は静かになった。

「とにかく捜査のお役に俺は立てそうもない。阿部佳奈という人物にはまったく心当たりがない。この

メールにも面識がないとあるとおり、この発信者はどこかでたまたま俺の名を知って、使えると思ったのでしょう」

佐江は告げた。仲田と高野が再び目を見交わした。

「実は、一昨日、新たなメールが届きました。発信地は、東京・新橋のインターネットカフェです」

高野がいい、仲田が新たな紙をさしだした。

『先日、メールをさしあげた阿部佳奈でございます。その後、捜査の進展はいかがでしょう。新宿警察署の佐江警部補に連絡をおとりいただけましたでしょうか。佐江警部補による保護を確約していただければ、わたしはいつでも出頭いたします。』

佐江警部補による保護が可能な状況になりましたら、わたしがメールをさしあげているホームページ上に、警視庁マスコットキャラクター『ピーポくん』の画像を貼りつけて下さい。それを拝見しだい、保護していただく方法をご相談したく存じます。どうかH県警捜査一課の皆さまのご理解をたまわりますよう、お願い申し上げます』

「H県警のホームページに警視庁のマスコットキャラクターを載せろなんて、ずいぶんな要求だ」
組対課長がつぶやいた。すでに二通のメールを読んでいるようだ。

「つまりそれだけ本気で、この重参は佐江さんを巻きこもうとしているともいえます」
副署長はいった。

「だとすると、俺に恨みをもっていて、巻きこむことでその恨みを晴らそうとしているのかもしれないね。ですがたとえそうであつても阿部佳奈という女は知りません。阿部佳奈を名乗る別人か、阿部佳奈の周辺にいて知恵をつけている者がいるか、です」

佐江がいうと、高野が佐江の目をとらえた。

「いずれにしても、ここは佐江さんにご協力いただくしかない、と我々は考えています」

「どうせよというのです？」

「阿部佳奈が我々に接触をはかるよう仕向けます。その際、本当に佐江さんが協力して下さっているという証明を求めてくる可能性があります」

佐江は頷いた。

「メールにあるような、保護、同行といったご面倒までおかけしようとは思いません。ですが身柄確保のためのご協力をお願いしたいのです」

「具体的には何をすればよいのですか」

佐江が訊ねると、高野は仲田を見た。

「まずは都内のどこかで、阿部佳奈と接触しようと我々は考えています。その場に佐江さんがいることを、当然向こうは要求してくるでしょう。そこで身柄を確保します」

仲田がいった。佐江は頷いた。

「わかりました。この宙ぶらりんな俺でよければ協力します。ただ、ひとつお訊きたい」

「何でしょう」

「このメールにある『H県警察に全幅の信頼を寄せられない理由』について、何か心当たりはあるのでしょうか」

「失礼だぞ」

組対課長がいった。佐江は組対課長を見やった。

「失礼な質問だというのはわかっています。しかしこのメールの内容が真実であった場合、阿部佳奈の口を塞ふさぐという動きが起るかもしれない。そうなったら俺は、犯人の側に加担することになる」

「佐江！」

組対課長は言葉を荒らげた。

「いえ。佐江さんのご懸念は理解できます」

高野がいった。

「すると心当たりがあるのですか」

佐江は訊ねた。

「あるとまではいえません。ですが殺害された本郷市長の三浦さんは、かつて現在の私と同じ職責にあられました」

「同じ？ 刑事部長だったということですか」

「はい。本郷市長選挙には、過去のH県警幹部が立候補し当選する、という歴史があります。三浦さんの前に市長を四期つとめられた方は、かつて県警の本部長でした。阿部佳奈は、三浦さんの同級生であつた上田弁護士からその話を聞いていて、我々の捜査に何らかの影響が及ぶのではないかと、疑つているのかもしれない。実はこのことも、メールの発信者が阿部佳奈本人だと考えられる理由のひとつです」

「なるほど」

佐江は頷いた。

「他に何か、お知りになりたいことはありますか」

仲田が訊ねた。佐江は考えこんだ。

「もし君がH県警に協力するというのなら、一時的に復職してもらおう。民間人の身分で現場にでるのは不適切だ」

組対課長がいった。佐江は組対課長を見た。本音では、協力を断ってもらいたいのだろう。明らかに迷惑そうな表情を浮かべている。

副署長は、どちらかといえばおもしろがつているような顔をしていた。

「ここまで我々にとって不名誉なお話をした以上、ぜひともご協力をお願いしたい」

仲田がいった。佐江は頷いた。

「わかりました。お役に立てるかどうかはわかりませんが、協力させていただきます」
渋面になった組対課長に告げた。

「身分証と拳銃を再貸与していただけますか」

「拳銃も、か」

「拳銃が使われたヤマです。万一の場合を考えれば、丸腰はマズいでしょう。それが駄目だというなら、協力はできません」

組対課長は大きく息を吐いた。

「わかった」

佐江はH県からきた四人の警察官の顔を見回した。

「では、どういう手を打つか相談しましょう」

「ありがとうございます」

仲田と高野が頭を下げると、若い二人もあわててしたがつた。

ホームページに「ピーポくん」の画像を貼りつけるのは川村の仕事だった。新宿からいったん県警本部に戻る。東京からは特急で二時間ほどかかる。サラリーマン時代、レンタカーで帰省したことがあるが、車でも渋滞さえなければ、同程度の時間で移動できた。

行確中に佐江にからまれたときは驚いた。いくら経験が少ないとはいえ、自分の尾行がバレているとは、まるで思っていなかったからだ。

だが「同じスーツ」を着ていたことを指摘され、自分の甘さを思い知らされた。

佐江の言葉どおりだった。たとえ短期間の出張であっても、これからは必ず着替えをもっていこうと決心した。刑事が尾行や監視を見抜かれるのは、恥以外の何ものでもない。

そして新宿署での話し合いにでて、佐江に対する見かたがかわった。

単純な石井は、

「重参は、本当にあの佐江っておっさんのことがわかってるのか。ありやマル暴の典型だよ。やくざばっかり相手にしているから、自分もやくざ、脳になっちまったんだ。あんなのに保護を頼むなんて、どうかしてる」

と電車の中で吐きだした。

「ですけど、重参が自分に恨みをもっていて、それを晴らそうとしているかもしれないなんて、ふつうは考えつきませんよ。冷静に事件を見ている証拠じゃないですかね」

「そりや冷静さ。H県なんていったこともないっていったじやないか。何があつても関係ないとタカをくくっているんだ」

「もしそうなら、県警のことまで訊きますかね。本気で事件について考えているから、訊きにいいことを訊いてきたのだと思うんですが」

「それは万一、重参が襲われたら、自分の責任になると思ったからさ」

「確かにそうですが、もし重参が襲われたら、どこから情報が洩れてゐるってことになります」

「そんなことあるわけないだろう。一課でも、まだ何人も知らないんだ」

確かにそのとおりだ。だが接触の詳細が決まれば、県警一課は、それなりの人員を東京に派遣することになるだろう。阿部佳奈の身柄確保は、四、五名では不可能だ。万一また逃がしたら、それこそ刑事部長や一課長の首がとぶ。

とはいえ、H県警から犯人側に情報が伝わることは、川村本人も思えなかった。県警を信頼できないといっているが、阿部佳奈本人が殺人犯かもしれないし、実行犯による口封じを恐れる共犯という可能性だってある。

そもそもH県警の歴代幹部が本郷市長選挙で当選してきたからといって、殺人事件の捜査情報をどこかに洩らすというのが考えられない。

警察官は家族にすら、捜査中の事件の情報を話すことを禁じられている。たとえ被害者に市長や地元有力企業の幹部が含まれていたとしても、捜査にかかわる話が市や企業に流れるとは考えにくかった。

が、東京で四年暮らしたことで、本郷市にずっといたのでは決して得られなかったであろう経験をした。十代の終わりから二十代の初めという時期ではあったが、川村は「孤独」というものを初めて東京で味わった。

十八歳で上京するまで、人口八万人の本郷市民のすべてを知っていたわけではない。が、近所・親戚、友人の縁者を伝っていけば、市民の十人にひとりくらいとはつながっていたように思う。

「どここの誰々は、誰そのの従兄いとこ」だとか、「誰その嫁ぎ先の隣に何々の店がある」といった調子だ。

そのせいで外出先で何をして、家族の耳に必ず伝わった。家族だけでなく、「どこを誰と歩いていた」「誰とどの店でお茶を飲んでいた」までが、友人たちに知られた。

それが監視されているようで、川村には息苦しかった。悪意を伴わない監視ではあったが。

だから上京を選んだ。できれば卒業後、東京で就職し、本郷市には戻らない人生を送りたいと考えていた。幸いに両親は健康で、下に妹がいたため、反対されることもなかった。

東京ではそれなりに友人ができたし、恋愛もした。その一方で、気づいた。本郷市での人間関係の濃密さは、ある種のセーフティネットなのだ。

東京では、自分が部屋で突然死しても、誰も気づかない。一日、二日、いや下手をすれば一週間放置される可能性がある。

東京では、失恋した自分が途方に暮れていても、人は一顧だにしない。自殺しかねない顔をしていたら、かわらないように遠ざかるだけだ。

自由の裏側には寂しさがある。それを当然のように耐えてこそ、都会での暮らしは成立するのだ。最先端の文化、華やかなファッションと孤独は背中合わせだ。

誰からも気にされない、興味を抱かれないからこそ、好きな洋服を着て、いきたい場所にいける。一千万を超える人々の中に、自分が知り自分を知る人は、ほんのごくわずかしかない。

会社員生活の二年は、まさに自分の存在理由との闘いだつた。駒でしかない自分は、いくらでも取り替えがきく。満員の通勤電車は、自分と同じような人間で埋めつくされていた。どこで生まれたとか食いのものは何が好きだとか、秘かに思いを寄せている人がいるかなど、何の意味もない。

ただ会社に運ばれ、働き、帰る。そのくり返して週末がきて、ようやく個人に戻ったと思い、新宿のような盛り場にいくと、そこもまた自分とまるでかわらない人間で溢あふれていた。

人との関係が薄いとは、つまり空気が薄いということだ。いくら息をしても、胸が満たされる感じが
ない。東京にずっといたら慣れるだろうが、それはつまり薄い空気で生きられる人間になってしまいうの
を意味している。

息苦しくても濃い空気を吸いたかった。うつとうしくとも多くの人とかわる日々を送りたかった。
それまでの人生で一番悩み、考え抜いた上で、川村は帰郷を決断した。

そしてH県の警察官募集に応募したのだった。濃密な土地で、さらに多くの人生とかかわる職業を選
んだのだ。

それがよかったか悪かったかは、まだわからない。だが人より遅いスタートであつたにもかかわらず、
刑事に抜擢され、わずか二年で捜査一課に配属された。この五年間は、警察官としては、追い風をうけ
ていたといえるだろう。

それでも川村は、もつといい警察官になりたいと願っていた。出世したいわけではない。警察官とし
て優れているからといって、必ずしも高い地位につけるわけではないことは、五年で十分、わかつた。

県警は典型的なピラミッド組織で、しかもその頂点に立つのは、中央から派遣されたキャリア警察官
だ。H県とは何のゆかりもない人物だったりする。求められる資格は、国家公務員Ⅰ種試験の合格者で
あること。優れた警察官かどうかは関係ない。

H県警に入ってほどなく警察における「出世」とはどういうものなのかを知ったとき、川村は軽い失
望を感じた。が、その一方で、出世を目的とせず警察官でありつづける人たちの「使命感」にも気づい
た。

誰かを守りたい、誰かの役に立ちたい、信頼される存在でありたい、そんな気持ちで警察官になり、
生涯それを通す人々の存在を知った。

幹部ではない、そうなることを期待しない、多くの警察官に、そういう人々がいた。

川村は初めて誇りを抱いた。そういう人々のひとりになろう、と思った。

新宿署で佐江と話したとき、彼もまた、そういう人間ではないかと川村は感じたのだった。

H県警の人々とはちがう。ひねくれていて粗暴で、権威というものに対し反感を隠さない。そうであるのに、よい警察官であることを放棄していない。

副署長とのやりとりでは、警察を辞めかけているような言葉を口にしてしたが、『冬湖楼事件』の話聞き、復職をすぐに決断し、組対課長もそれをうけいれた。

それはつまり、自らいった「クビ」という言葉とは裏腹に、警察は佐江に辞めてほしくない状況だったことを表している。

H県警への協力を組対課長が望んでいなかったのは、官僚にありがちな、前例のない面倒を嫌ったからだろう。前例のない行動をとることで責任を問われたくないのだ。

それはH県警にもある。前例のない行動は、その答えがでなかったとき「軽はずみ」「目立ちたがり」という批判をうけやすい。一度そういうレッテルを貼られたら、くつがえすのは容易ではない。

石井がいうように、佐江はやくぎ脳かもしれない。最初にパンチをくらわし、相手のでかたで力量を判断しようというのは、確かにやくぎや愚連隊の考え方だ。暴力団事務所の監視カメラを挑発したのは、演技だけではない、佐江のそういう性格があったからだ。

もし佐江と組んで捜査にあたることになったら、摩擦や衝突は避けられない。課長の仲田はそれを予感したからこそ、接触時の立ち会いを求めるだけにとどめたのだ。もちろんさらなる協力を求めるのは、H県警のメンツを潰すことにもなる。

佐江は気づいていて、協力を約束した。見下しめせず、事実のみに興味を抱いた。

佐江が優れた警察官だと川村が感じた理由は、その点にあった。

自分より階級が上の、地方警察幹部が協力を求めてきたら、ふつうは優越感にひたる。恩に着せ、いざ、さも自分のほうが優秀であるかのようにふるまうだろう。

だが佐江はちがった。仲田の屈辱感を察知し、それを刺激せず、しかし真実を知ろうとした。阿部佳奈がH県警を信頼できないとする理由を訊ねたのは、そのためだ。

メンツや立場とは関係なく、事件にのみ興味を抱いている。

佐江がもし、「冬湖楼事件」の捜査にあたったら、真犯人をつきとめるかもしれない。

そう考えるとわくわくした。仲田や高野には、そんな考えは露ほども悟られてはならない。H県警察官としては命とりだ。

「ピーポくん」の画像をホームページの、かなり目立つ場所に貼りつけ、川村は阿部佳奈からの連絡を待った。

『ホームページ拝見いたしました。無理なお願いをしたにもかかわらず、うけいれて下さったH県警の皆様には心より御礼申しあげます。つきましては、佐江警部補がわたしの保護をして下さいますことを確認したく、警視庁新宿署にお電話をさしあげる所存です。佐江警部補のご意思を確かめましたのち、出頭の詳細を決めさせていただきたいと考えております』

川村がさしだしたプリントアウトを見つめる仲田の表情は険しかった。

「ここから先は、重参は佐江と直接話して決めるってことか」

「そう、読めます」

仲田は川村の顔をにらみつけた。

「新宿署の交換台を通して佐江さんにつないでもらえば、本人と話すことが可能です」

川村がいうと、

「そんなことはわかつてる」

仲田は吐きだした。

「問題はいつ、電話をかけるかだ。もうかけているのか、これからか」

「佐江さんに訊かないと……」

仲田は川村の顔をもう一度にらみ、そして息を吐いた。

「厄介だな。佐江に誰かを張りつかせるしかないか」

川村は待った。仲田の目は課内を見回し、また川村に戻った。

「いけるか？」

喜んで、といいそうになるのをこらえ、川村は頷いた。

「顔も互いにわかつていますから。私でいいと思います」

「向こうは嫌がるかもしれんぞ」

「お互い仕事だというのを理解してもらえれば何とかなるのではないでしょう」

川村が告げると、仲田はおや、という顔をした。

「そうか。じゃあ頼んだぞ。新宿署のほうには、俺から連絡をしておく。今日中に向かえるか？」

「大丈夫です」

「一日二日じゃ帰れないかもしれん。そのつもりで準備をしていけ」

「了解しました」

川村は一度寮に戻り、仕度を整えてから午後一時発の特急に乗りこんだ。東京駅に着くと地下鉄丸ノ

内線に乗り換え、西新宿に向かう。

新宿警察署が、JR新宿駅の東側ではなく西側にあることに川村は改めて気づいた。本来なら歌舞伎町のある東側のほうが出勤に便利なのではないか。

そう思って、持参した東京都の地図で新宿区のページを開くと、新宿区役所が東側の歌舞伎町一丁目にあつた。区役所の建物が事件発生が多そうな歌舞伎町にあり、警察署は高層ビル街の西新宿にある。これでは逆だ。ふたつの建物を入れかえたほうが職員にとつても便利なのではないか。

そう考え、気づいた。区役所には、毎日多くの市民が訪れる。戸籍などの手続き、年金、福祉といった行政サービスをうけるため、区民だけでなく外国人もやってくる。

それに比べたら、警察署を訪れる市民は決して多くはない。望んで警察署にやってくる者はまれで、むしろいやいや訪れる人間のほうが多いのではないか。

歌舞伎町に区役所があるほうが、市民にとつては便利なのだ。

歌舞伎町と聞くと、川村はつい「盛り場」「ガラが悪い」というイメージを抱く。それはまちがっていないと思うが、上京した頃、休みになると自分もアテもなく歌舞伎町をめざしたように、誰にとつても足を運びやすい街であることは確かだ。線路をはさんで、東が歓楽街、西がオフィス街という、新宿のありようも独特で、こんな街は他にない。

地下鉄を降りたところで、携帯に仲田からメールが届いた。新宿署の組対課長に、川村がいくことを伝え、了承をもらつたという内容だつた。佐江に関しては、触れていない。

それを見やり、川村は苦笑した。歓迎されると思つていない。が、事件解決のためには、佐江のそばを離れるわけにはいかなかった。疎まれ、罵^{のの}られても、佐江から離れない覚悟が必要だ。

新宿署に到着すると受付を通し、組対課に向かつた。

課内に足を踏み入れた瞬間、空気かわるのを感じた。明らかに極道の世界だ。刑事とそれ以外の区別がまるでつかない。スーツにネクタイを締めた男を刑事だと思ったら、スポーツウエアの上下を着けたチンピラのような男に怒鳴られている。

「手前、何回同じことをいわすんだ。そんなとぼけたいいわけが通る筈ねえだろう！」

スーツが被疑者で、スポーツウエアが刑事のようだ。つい見いつていると、

「川村さん！」

声が聞こえ、我にかえった。組対課長が奥のデスクから手をあげている。

「失礼します」

誰にともなく川村はいった。が、誰ひとり反応する者はない。パソコンのモニターをにらみつける者、電話で話しこんでいる者。

「何だあ、またお前か。ナメてんな。一回懲役しょって勉強してくるか。おい」

スポーツウエアの刑事の横で腰に手をあてているのは、スーツはスーツだがシャツの前を大きく開けて、髪をオールバックにした男だ。腰にさした拳銃が丸見えだった。

「うっせえんだデコスケが！」

いきなりスーツ姿の男がキレた。とたんに周囲のデスクにいた刑事たちが立ちあがる。

「今何つったこら、もう一回いつてみろ！」

「デコスケにデコスケつつて、何が悪いんだよ」

「おい、ちょっとこい！」

スポーツウエアがスーツの男を立たせた。

「部屋空いてますか？」

「二番が空いてる」

誰かが答え、スーツの男はつきとばされた。

「お前のその口よ、二度ときけねえようにしてやつから。取調室いくぞ」

「おうおう、かわいそうに。唇むしられんぞ」

「血、ふいとけよ！」

課内から声がとんだ。

「遠いところをお疲れさま」

気づくと、組対課長がかたわらにいた。連れられていくスーツの男を川村が見ているのに気づき、
「あいつは、女をひっかけちゃ風俗に沈めるスケコマシですよ。エリートサラリーマンのフリして、女に近づく。平気でしゃぶは使うし、逆らったら女をボコボコにする。暴力団がバックにいるんで、恐がつて女も被害届をださない。まあ、クズの中のクズですね」
淡々といった。

「昔は、ああいうのが田舎から遊びにきた女の子をひっかけようと駅のあたりにたむろしていましたが、今はインターネットの出会い系サイトとかを使うんで、現場がおさえづらくなってます」

「サイトを使ったら場所はいくらでも指定できますからね」

川村が答えると、

「お宅の課長からうかがったのですが、川村さんはそちの学校に通われたあと、東京でIT関連のお仕事をされていたとか。地元に戻らず、警視庁に就職してくれたらよかったのに」

組対課長はいった。お世辞でも悪い気はしない。思わず笑みが浮かんだ。

「いや、自分なんてほんのかじった程度で、とてもお役には立てません」

「でも捜一、のホームページは川村さんが担当しているんでしょう？」

「あれは新米の役目なんです」

「なるほど。佐江はまだできていませんが、暗くなる前には顔をだすと思います。こちらへ」

小さな会議室で川村は組対課長と向かいあった。こうして見ると、組対課長は四十代半ばで、佐江とあまり年齢がかわらないようだ。

ただ佐江より額が後退している。

川村は阿部佳奈から届いた最新のメールのプリントアウトをとりだした。

「なるほど」

目を走らせ、組対課長はつぶやいた。

「うちの交換を通して佐江に連絡してくるというわけですな。いれば、まちがいなく本人と話せる。賢いですね。この重参に犯歴はないのですよね？」

「ありません」

「だとしたら誰か知恵をつけているのかもしれない。三年も逃げ回るのは、カタギじゃふつう難しい」

「佐江さんあてに電話はかかっていますか？」

川村が訊くと、組対課長は会議室にあった内線電話をとりあげた。

「交換に訊いてみます」

問い合わせた結果は、なしだった。きのうもかかってきていない。

「携帯がありますからね。最近は刑事に名指しの電話が外線で入ることは、めったにない」

「そうですよね」

「川村さんがこられた理由は、お宅の課長からうかがいました」

「佐江さんにはご迷惑でしょうが、重、参を確保するまでは何とかそばにいさせていただきたいと思っています」

組対課長は唸り声をたてた。

「正直、本人しだいです。あれは本当に職人氣質かたぎの刑事でして、組んだ相手が気に入らないと、話もうくにしない」

「やっぱり」

川村は息を吐いた。

「うまくいった人というのはいなかったのですか？」

組対課長は宙を見つめた。

「過去、二人いました。どちらも本庁の捜一にいた人間でした。二人とも、殉職しました」

川村は言葉を失った。

「な、亡くなった理由は？」

組対課長は川村の目を見つめた。

「撃ち合いです。被疑者に撃たれた。以来、佐江は自分と組んだ者は死ぬ確率が高いと感じているようです」

「休職中だったのは、それが理由ですか」

「別の理由ですが、お話しするわけにはいかなない事情がある」

組対課長はきっぱりと言った。川村は頷く他なかった。

内線電話が鳴った。

「はい、会議室。おう、よこしてくれ」

受話器をおろし、組対課長は川村をふりかえった。

「佐江がきました」

6

会議室に現れた佐江の顔からは、ヒゲがきれいさっぱり消え、スーツにネクタイを締めている。

とはいえスーツもシャツも皺しわがよつていて、とても有能な刑事には見えない。いかにも、くたびれた中年のサラリーマンだ。

「お」

佐江は川村の顔を見るなり、低い声をだした。

「動きがあつたんだな」

「まあ、すわれ」

組対課長の言葉にしたがつた佐江に、川村はプリントアウトをさしだした。

「いつきた？」

一読した佐江は訊ねた。

「今日の午前二時の発信です。新宿区歌舞伎町の『ジャングル』というインターネットカフェからでした」

「近寄ってきたな」

組対課長がつぶやいた。

「俺あての電話がかかってくるのを、横で待つつもりか」

佐江は川村を見つめた。

「そうさせていただければと思つています」

目をそらさず川村は答えた。

「電話がかかってきたとして、出頭の具体的な方法を俺が決めていいのか」

それについては仲田と打ち合わせてあった。

「はい。ただ県警の人間が周囲を固められる場所にしていただけるとありがたいのですが」

「新宿署への出頭はどうなんだ？」

佐江が訊ねた。川村はためらった。できれば新宿署の外で身柄をおさえたいというのが仲田の考えだ。

「メンツの問題か」

佐江がつぶやき、川村は頷いた。週刊誌などを騒がせた事件だ。あとあと、なぜ新宿署だったのかに注目されるのを避けたいと仲田はいつていた。阿部佳奈がH県警を信頼していないという情報が広がるのもまずい。

「そうなる、公園とか駅前広場という場所になるな。君がいることをその重参が確認した上で、接触をしてくる」

組対課長がいった。

「俺の役目は、釣りのエサです。エサが釣りかたを注文するわけにはいかないでしょう」

「よろしいんですか」

自分の声が上がっているのがわかった。佐江は頷いた。

「ありがとうございます」

「じゃあいくか」

佐江が立ちあがったので、川村は思わず顔を見た。

「どこにです？」

「重参を捜しに行く」

わけもわからず、新宿署をでる佐江のあとを川村は追いかけた。とりあえず、荷物は預けてきた。

「重参の写真はあるか」

歩きながら佐江が訊ねた。川村は手帳からだし、渡した。高校の卒業アルバムの複写だ。ひと目見るなり、佐江は首をふった。

「本当に、こんな昔の写真しかないのか」

「写真嫌いだったらしく、大学生や社会人になってからのものが見つかりませんでした」

「今、三十五だろう。倍近く年がいつてる。まるで顔が変わっているかもしれない」

「周囲の話では、化粧もあまりしない地味なタイプだったそうなので、さほどちがいはないのではないかと」

「体型は？ 太ったとか痩せたとか」

「極端にはかわっていないようです」

「つまり化けようと思えば化けられるわけだ。元が地味なら派手にすれば別人になる」

佐江のいう通りだ。

「どちらへ？」

「とりあえずメールを打ってきたインターネットカフェで訊きこみをする。もう、したのか？」

川村は首をふった。

「それも考えたのですが、重参を警戒させてもマズいかと」

本当だった。

「だが前のときは荻窪のインターネットカフェを張りこんだのだろう」

「あのときは自分ひとりではありませんでした。それに新宿歌舞伎町となると、本当に近くにいる可能性がありますから」

「刑事だと思抜かれると思ったか」

川村は思わず頷いた。佐江は足を止め、しげしげと川村を見やった。

「ネクタイは外したほうがいい」

川村はあわてて首もとに手をやった。

「刑事っぽいですか」

「趣味が悪い。それに昼間歌舞伎町をうろつくサラリーマンは、たいていネクタイをしていない」

昔のガールフレンドにもらったブランドもので気に入っている。むっとしながらも、川村はネクタイを外した。

「佐江さんは外さないんですか」

くやしくなり、思わず訊ねた。佐江は川村をにらみ返し、歩きだした。

「意味ない。俺はメンが割れている」

腹がでているのに佐江の足は早かった。青梅街道おうめを東に進み、大ガードをくぐって歌舞伎町一番街の入口に十分足らずで達する。

「『ジャングル』はこの先だ」

信号で止まるといった。

「新宿のインターネットカフェを全部ご存じなんですか」

「管内のは、な。インターネットカフェやマンガ喫茶は、追われている奴がとりあえず逃げこむ場所の一番手だからな」

確かにその通りだ。

信号を渡り、歌舞伎町の中へと足を踏み入れた。あたりが明るくなった。夕刻だから空は薄暗いのだが、飲食店の看板の放つ光が強い。それに合わせてアナウンスや音楽が降ってくる。アナウンスは日本語だけではなく中国語や韓国語も交じっていた。

人通りは多い。川村は懐かしさを感じた。細かな部分は変化しているだろうが、街全体を包む熱気は、十年以上前の学生時代とかわらない。

佐江が立ち止まった。一階にコンビニエンスストアが入った雑居ビルの前だった。三階から五階まで「ジャングル」の看板がでている。

佐江はビルの入口に歩みよると、あたりを見回した。奥にエレベータがあるが、乗りこむ気配はない。「写真をくれ」

川村は手渡した。

「予備があります。もっていて下さい」

佐江は頷き、斜向かいのビルを示した。

「あの二階に喫茶店があるだろう。その窓ぎわの席にいつて、待っていてくれ」
「了解しました」

インターネットカフェへの訊きこみに同行したかったが、それはできないようだ。佐江がエレベータに乗るのを見届け、川村はいわれた喫茶店に移動した。ビルのワンフロアを占める大きな店で、二十四時間営業をうたっている。

その窓ぎわの空いたテーブルにすわり、はつとした。「ジャングル」の入ったビルの出入口が丸見えだ。

思わずあたりを見回した。阿部佳奈がいるかもしれない。

女ひとりの客はいなかった。中年男女の団体と、もう少し年のいった女性ばかりのグループ、それに若いカップルといったところだ。

ウェイターが水のコップを運んできた。

「コーヒーを下さい」

いつてから、川村は身分証を見せた。

「警察の者です。この女性を見ませんでしたか？　きたとすれば今朝の午前二時くらいで、窓ぎわの席

にすわったと思うのですが」

写真を手渡し、小声で訊ねた。ウェイターは、学生のアルバイトのようだ。

「その時間だとシフトがちがうんで。店長に訊いてきましょうか」

「お願いします。それと写真は学生服ですが、現在は三十歳を過ぎています」

川村がいうと、当惑したように写真を見直した。

「もつとおばさんになつてゐるつてことですか」

二十そこそこから見ればそうなのだろう。川村は頷いた。ウェイターは奥にいき、やがてコーヒーを

運んでくると答えた。

「店長もわからないそうです。その時間は店が混んでいて」

「そんな遅くに混んでいたの？」

驚いた川村が訊き返すと、ウェイターはあたり前のように頷いた。

「仕事の終わったホステスさんとか始発待ちのお客さんとかが入ってくる時間なんで」

「そうなんだ……」

H県ではありえない。電車の始発がでるまでどこかで時間を潰すくらいなら、車で飲みにでて帰りは運転代行を頼む。それに何より、二十四時間営業の喫茶店がない。

写真を返され、川村は息を吐いた。

コーヒーをひと口飲み、向かいの雑居ビルに目を向ける。仕事帰りのホステスが多くいたなら、まぎれてしまった可能性もある。阿部佳奈にも水商売のアルバイトをした経験があつた筈だ。

はつとした。阿部佳奈は化粧をしない地味なタイプだという話だった。なのに銀座のクラブで働いていたというのか。

素顔がよほどの美人ならともかく、そうでなければ化粧もせずにホステスの仕事ができとは思えない。

すると社会人になつてから地味にしていたのは、水商売の反動かもしれない。派手にしていた過去が嫌で、化粧をしなかったのだ。

川村はテーブル上の写真に目を落とした。短いおかつぱで、硬い表情を浮かべている。写真嫌いだからか、唇を結び、視線もレンズから微妙にそれている。

「重参はきていたか？」

声に我にかえつた。佐江がいつのまにか、かたわらに立っている。

「いえ、深夜二時頃は混んでいたの、わからないそうです」

川村は答えた。佐江は向かいにすわると、

「アイスコーヒー！」

とウェイターに叫んだ。

「誰に訊いた？」

「店長に訊いてもらいました」

アイスコーヒーを運んできたウェイターを示して、川村は答えた。

「そうか。悪いけど、店長をここに呼んでくれるか」

佐江はウェイターに頼んだ。やがて三十代後半の蝶ちようタイをつけた男がやってきた。

「何でしょう」

「新宿署の者です。今朝の二時頃、窓ぎわにひとりですわった女はいなかった？ 待ちあわせじやなく、ひとりできたと思うのですが」

佐江は訊ねた。

「おひとりですか……」

男は眉根をよせた。

「そういえばいらしたような気がします。たぶん水商売の方だと思うのですが」

「なぜそう思う？」

「その、格好が。そういうドレスを着て、革ジャケットを羽織つてらしたので」

「キヤバ嬢はだいたい着替えているだろう？」

「そうですね。そういう意味では珍しかったかもしれません」

「この写真に似ていましたか？」

佐江がいうと、男は首をふった。

「ぜんぜん似てません。髪の色もかなり明るかったですし、化粧もきつい感じでした」

「何時くらいまでいた？」

「山手線の始発がでるくらいまでですから、四時四十分くらいですかね。だいたいそれくらいになると、お客さんがひくんですよ」

「ずっとひとりですか？　電話とかもせず」

「ずっとおひとりでした。コーヒーを一回、お代わりされたかな」

「何か他に覚えていた特徴はありませんか。ホクロとか」

黙っていられず、川村はいった。自分の訊きこみが甘かったのを痛感していた。

「ないですね。申しあげたように忙しかったですし、お客さまをじろじろ見るわけにもいきませんから」

佐江が礼をいい、男は離れていった。

「すみません。まるで駄目でした」

店長がいなくなると、川村は佐江にあやまった。

「自分が使えないってことがわかりました」

「H県に二十四時間営業の喫茶店はあるのか」

「ありません」

「じゃあしかたがない。夜中に混むとは思ってなかったのだろう」

佐江の言葉に驚いた。

「その通りです」

「それに連中は、警察とはそんなに仲よくしたくない。警察官は、暴れる酔っぱらいさえつまみだしてくれればいいんだ」

川村は頷き、疑問をぶつけた。

「キャバ嬢が着替えているというのは、どういう意味です？」

「キャバクラで働いている女は私服で出勤し、店でドレスに着替え、帰るときはまた私服になる。ドレス姿で外にいるのは珍しい」

「私服だったらキャバ嬢かどうかわからないのでは？」

「髪型がちがう。ジーンズ姿でも派手に巻き毛にしているから、見てわかる。中には面倒だからと、着替えず、店服で帰るものもある」

「重参は、そのフリをしたと？」

「あの店長が見た女がそうだったらな」

「ドレスなんてどこで手に入れたんです？」

「レンタルがあるし、実際どこかで働いているのかもしれない」
「いわれて気づいた。潜伏中、水商売をしていた可能性はある。」

「インターネットカフェはどうでした？」

「その時間はやはり満室だったが、防犯カメラに入室する重参が写っていた。コピーが明日、署に届く」

「本当ですか？ 佐江さんはそれをご覧になりました？」

「見た。キャップをかぶって紙袋を抱えたジーンズ姿の女だ。顔の正面は写ってない。一時間で退室したが、でていくときはドレス姿だった。だからこの店長が見た女の可能性は高い」

「インターネットカフェは身分証の提示を求めなかったのですか？」

「求めた。女は、『ジャングル』の会員登録を見せている。『ジャングル』はチェーン店なので、どこかの

店で会員になれば、あとは会員証を見せるだけで入店できる。会員証の番号は記録にあるから、ビデオ映像といっしょに情報が明日届く筈だ」

「やった」

思わず川村はガッツポーズをした。映像と会員証の情報があれば、出頭前に重参を確保できるかもしれない。そうなれば大手柄だ。

「喜ぶな」

佐江がぴしゃりといった。

「なぜ重参が着替えてまで、ここにいたのかを考えてみる。警察の動きを予測している。防犯カメラの映像や会員証の情報ではつかまらない自信があるんだ」

「そうか……。その通りですよ」

川村はうなだれた。

「でもなぜ、重参はここにわざわざきたんでしょう？」

「問題はそこだ。日県警が本当に警視庁と連絡をとったのかを確かめるのがひとつ。さらに考えられるのは――」

いって佐江は黙った。

「考えられるのは何です？」

「警察以外に自分の情報が伝わっていないかを知ろうとした」

「警察以外？ どこです」

「『冬湖楼事件』の実行犯がプロなら、雇った人間に県警から情報が伝われば、またプロが動く」

「待って下さい、それって――」

「重参の考えを推理しているだけだ。実際にそうだといっているわけじゃない」

「もちろんですよ！ そんなこと、ありえません」

川村は語気を強めた。

「県警を信用できないと考えているからこそ、重参は俺を指名してきた」

「だったら、佐江さんを指名した理由にも疑問があります」

思わずいった。

「だからこそ俺の行確をしたのだろう。俺を洗って、重参とのつながりが見つかったか？」

川村は首をふった。

「だろ。俺にもわからないのだから、お前らにわかる筈がない。ただ、いえるのは、この重参はかなり頭がいい。そして頭がいいからこそ、この三年、つかまることも殺されることもなく、潜伏できた。そんな女を簡単に見つけられるとは思わないことだ」

「でもなぜ——」

「なぜは本人から訊け。無事、出頭さえさせられれば、理由がわかる。とりあえず戻るぞ」

佐江はいって、立ちあがった。

7

翌日の正午、佐江が新宿署に出勤すると、組対課の入口で、いてもたってもいられないという表情の川村が待っていた。

「佐江さん！」